

雲出川中流域の中世寺院跡と石造宝塔

伊藤 裕 偉

はじめに 雲出川中流域の特徴

伊勢平野の中央を流れる雲出川の中流域（現在の三重県津市白山町・一志町域）は、室町後期に天台真盛宗の開祖となった真盛上人（一四四三～一四九五）を輩出した地域である。この地域には、鎌倉・室町期の真言系・天台系寺院として高田寺（廃寺、現在の津市白山町川口に所在）や開泉寺（同市同町家城、現在は天台宗）などが点在しており、当時作られた仏像が今も各所に残されている⁽¹⁾。これら社寺によって形成された文化的土壌により、この地に真盛という高僧が出現したと考えられるのである。

真盛の存在により、現在この地に天台真盛宗寺院が集中するのは当然なのだが、一方で白山社（白山比咩神社。以下、歴史的動向をいう際には「白山社」、現在の状況をいう際には「白山比咩神社」と記す。）の集中があり、見逃せない特色となっている。旧加賀・飛騨国境（現在の石川・岐阜県境）に聳える白山連峰を源とする白山信仰は、大きく捉えれば修験道と密教の融合によって普及したのだが、鎌倉・室町期の畿内近隣で最も集中的に白山社が造立され、今なお信仰が続く特徴的な地域として当地は特筆できる。白山社と前記寺院群とが有機的な関係を有すると見ることも、蓋然性の高い推測として許されるであろう。

さらに、真盛上人の活動期と重なる一五世紀後半には「小倭一揆」と呼ばれる地域結合がこの地で機能していた⁽³⁾。この地域結合は真盛上人へ誓書を献ずる形で取り結ばれているのだが、その文中にも白山社が登場している⁽⁴⁾。つまり白山社は、中世の段階からこの地の精神的支柱となる存在だったと認識できる。

また、当地に特徴的な中世仏教資料に石造宝塔がある。巨視的に密教系と見られるこの石造物は、旧伊勢・伊賀国（以下、「伊勢」等と表記）全体としては決して多くないが、当地には集中分布する。そして、後述するが白山社とも無縁とは考えられないのである。

中世の雲出川中流域は、以上のように多彩な文化的要素が見られる地域である。なかでも白山社の密集は当地最大の特徴といえ、その状況解明は、この地の歴史的特色を知るうえで欠かせないと考えられる。

では、雲出川中流域はこれまでどのように検討されてきたのか。まず、天台真盛宗と成願寺・真盛上人については色井秀讓氏の⁽⁵⁾労作のほか、立教大学日本史研究会による調査がある⁽⁷⁾。白山信仰に関しては吉田幸平氏の⁽⁸⁾整理があり、川口白山比咩神社と真言院に関する課題が熊崎司氏⁽⁹⁾によって提示されている。近年では辻本豊氏⁽¹⁰⁾によって白山社に関する検討が深められている。また、小倭一揆については瀬田勝哉氏⁽¹¹⁾による先駆的な研究や、藤木久志氏⁽¹²⁾指導のもとでの検討もなされている。当地に残る

(33) 矢穴の時期については私見による。また、以下の論文も参照した。金子浩之「石材矢割り技法の展開」(『芙蓉芳の考古学』六一書房、二〇一〇年)。

(34) 「山雄田荒廢記」に見える記載と関連する事項を追記する。この史料で「満山の会所」があったとする「寄合洞」は、当地の南部に「大洞」(井生)・「洞」(川口)という小字地名があり、それとの関係が考えられる。また「満山の風呂」があったとする「風呂屋之谷」は、当地の西方約1kmに「風呂之谷」の小字地名があり、これとの関係が想定される。ここは江戸期に銅鐸が出土した場所として知られる。なお、辻本豊氏は「風呂之谷」が川口白山社から1km以上離れるため、そこに風呂(湯屋)があったことについては疑義を示されている(辻本前掲論文)が、根来寺(和歌山県岩出市)で検出された大湯屋遺構(平成一五年度岩出市教育委員会調査)は中心伽藍から七〇〇mほど離れた場所に位置するため、川口の風呂(湯屋)も中心部から離れた場所にあった可能性は捨てきれない。

(35) 前掲『勢陽五鈴遺響』三。

(36) 白山町郷土史編集刊行委員会編前掲註(1) 文献所収。

(37) 森田克行「畿内における近世瓦の成立について」(『摂津高槻城跡―本丸跡発掘調査報告書―』(高槻市教育委員会、一九八四年)。

(38) 白山町郷土史編集刊行委員会編前掲註(1) 文献など。

(39) 来迎寺宝塔(伊賀市上友田)など。来迎寺宝塔の詳細は、三重県教育委員会『三重県の文化財保護平成30年度』(二〇二〇年)を参照されたい。

(40) 川口白山比咩神社本殿前にある元亀四年銘石造燈籠についても、当該期の白山社整備の一環で把握できるのではないだろうか。

(41) 時枝務『霊場の考古学』(高志書院、二〇一四年)。

(42) 拙稿前掲註(17) 文献。

(43) このことについては、拙稿「中近世移行期の石塔に見る受容・醸成・変容・発信」(『地方史研究』四一八、二〇二二年)を参照されたい。

- (12) 藤木氏編前掲註(7) 文献。
- (13) 三重県教育委員会編『三重の中世城館』(一九七七年)、小玉道明他「三重県」(『日本城郭体系』10、新人物往来社、一九八〇年) など。
- (14) 福原氏前掲註(7) 文献、竹田憲治「中世北畠氏関連の城郭群―雲出川上流域を中心に―」(『Mehistory』11、二〇〇〇年)。
- (15) 当地にかかる文献として、津市教育委員会編『はくさんの石造物―川口地区編―』(二〇一〇年) を挙げておく。
- (16) 拙稿前掲註(3) 文献。
- (17) 小稿で詳細に検討する川口井生白山坊院跡・南出白山坊院跡・布引坊院跡については、拙稿「伊賀・霊山山頂遺跡と歴史的重層性」(『忍者学大全』東京大学出版会、二〇二三年) で一部触れている内容と重複することをお断りしておく。
- (18) 『勢陽五鈴遺響』三(三重県郷土資料刊行会、一九七六年) など。他には、白山大権現、白山妙理権現などとも呼ばれる場合がある。
- (19) 祭神を伊弉諾(伊弉冉ではない)・泉守道者(伊弉諾の和魂)・菊理媛(伊弉冉の荒魂)とする説もある(前掲『勢陽五鈴遺響』三)。
- (20) 『勢陽五鈴遺響』三では、雲出川中流域への白山社勧進縁起として、白山権現を笈に背負ってやって来た鎮徳上人が瀬戸ヶ渕(白山町家城付近)に腰掛けたところ、そこから七羽の鷲が飛び出し、七箇所に降り立ったという。その七箇所が小倭・竹原・飯福田・山田野・八対野・井生川口・家城で、そこに白山権現を祀った、とする。もちろん、伝説の域を出ない話ではあるが、こういった縁起が地元で大切にされていることは認識しておきたい。なお、天文二二年の鎮徳上人伝承については、色井秀讓氏が示唆するように、筆者も白山社の「再興」を示す時期だと考える。
- (21) 玉井敬泉「白山の祭神と信仰」(『白山信仰』民衆宗教史叢書第

- 一八巻、雄山閣出版、一九八六年)。「神社明細帳」は三重県神社庁蔵。
- (22) 前掲『勢陽五鈴遺響』三。
- (23) 「成願寺文書」(『三重県史』資料編編中世二)。なお、「山雄田白山」は南出の白山社を指すとするが、「山雄田」の呼称は当地の白山社を考えるうえで重要である。というのも、川口、南出、八対野(山雄田氏子中)、飯福田(山雄田白山権現社)など、いずれも「山雄田」の地名が登場する。なぜ「山雄田」という地名が共通するのか、筆者は未だに定見を持ち合わせないが、注意すべき重要なポイントだと考えている。
- (24) 家城神社蔵。翻刻文は、参道に掲示されている解説板の画像から活字化した。
- (25) 真言院境内にある法印祐栄の供養塔には、祐栄が伊賀の愛宕山(現在の愛宕神社・伊賀市上野愛宕町)開基となった小天狗清蔵の弟子で、「第二天狗」を名乗ったことが記されている。津市教育委員会編前掲註(15) 文献。
- (26) 蔵王権現を祀る津市美杉町三多気の真福院蔵王堂には、「三嶽山／奉寄進／蔵王権現／川口／正白山／法印／快盛」の銘がある。快盛は、真言院墓地の碑銘では「快誓」とあり、元禄一四年三月に没している。前掲『はくさんの石造物―川口地区編―』。
- (27) 色井氏前掲註(6) 文献所収。
- (28) 「西大寺諸国末寺帳」(松尾剛次『勧進と破戒の中世史』吉川弘文館、一九九五年所収)。
- (29) 熊崎氏前掲註(9) 文献に掲載。
- (30) 津市教育委員会編前掲註(15) 文献。
- (31) 熊崎氏前掲註(9) 文献。
- (32) 採集遺物は、津市教育委員会が保管されている。

流布（伝播）する状況は見られない。当地は、石造宝塔という文化を受容し醸成しつつも、他地域には発信しなかった。このことは、当地で醸成された石造宝塔という密教系文化が、あくまでも受容（消費）としてのそれであり、発進力（それと表裏関係にある求心力）を伴うものではなかったと現段階では見ておきたい。⁽⁴³⁾

また、石造宝塔が多く造立される一四世紀後葉から一五世紀中葉頃にかけての時期は、経塚造営期（一二世紀後葉）と坊院群隆盛期（一五・一六世紀）とをつなぐ時期であることも注目できる。詳細な調査が進めば経塚・石造宝塔・坊院群それぞれの性質の違いも明らかとなるだろうが、大きく見て三者が有機的な関係にある点は重視できると考えている。

一五世紀に天台真盛宗の開祖・真盛上人が登場した雲出川中流域。この地には、白山社・石造宝塔・坊院群など、真盛上人誕生以前から独特の仏教文化が展開していたのである。真盛上人の登場は、もちろん彼自身の修練によるところが大きいのであろうが、彼を育んだ雲出川中流域の地域的特色はより一層の評価が必要であらう。

小稿は、令和三年一〇月三〇日に三重県総合博物館で開催された第二九回企画展「寺院に伝わる戦国の残像―北畠氏のいた時代―」連続講演会で、「密教系寺院と白山権現社（白山比咩神社）のある風景」と題して行った報告の内容を基に成稿したものである。現地調査にあたっては、地元の方々に大変お世話になり、川口白山比咩神社宮司の宮路千行氏には資料閲覧の便宜を図って頂きました。また、成稿にあたっては、熊崎司、山路裕樹の各氏から有益な助言をいただきました。記して感謝いたします。

註

- (1) 高田寺や開泉寺をはじめとした密教系寺院の概略については、白山町郷土史編集刊行委員会編『三重一志白山町文化誌』（白山町教育委員会事務局、一九七三年）等を参照した。
- (2) 下出積與編『白山信仰』（民衆宗教史叢書第一六巻、雄山閣出版、一九八六年）。
- (3) 「成願寺文書」（『三重県史』資料編編中世二）。
- (4) 拙稿「中世石造物を受容すること―畿内近隣（伊賀・伊勢・志摩）の宝塔を素材に―」（『中世石造物の成立と展開』高志書院、二〇二〇年）。
- (5) 瀬田勝哉「中世末期の在地徳政」（『史学雑誌』七七―九、一九六八年）。
- (6) 色井秀譲『小倭成願寺文化誌』（三重県郷土資料刊行会、一九七三年）。
- (7) 矢島有希彦・福原圭一・窪田涼子「成願寺・城・五輪塔」（藤木久志編『莊園と村を歩く』校倉書房、一九九七年）、矢島有希彦・涌井美夏・阿諏訪青美・窪田涼子「戦国期小倭成願寺と村の復元」（『三重県史研究』一四、一九九八年）。
- (8) 吉田幸平『伊勢白山信仰の研究』（三重県郷土資料刊行会、一九八六年）。
- (9) 熊崎司「白山町川口白山比咩神社境内出土の経塚資料について」（『Miehistory』一六、二〇〇五年）。
- (10) 辻本豊『山雄田興廃記』を読み解く（上・下）」（『三重の古文化』一〇四・一〇五（二〇一九・二〇二〇年）、同「七白山の信仰と歴史」（『三重の古文化』一〇六（二〇二一年））。
- (11) 瀬田氏前掲註（5）文献。

第 1 表 雲出川中流域の石造宝塔一覧

	名 称	所 在 場 所	構 成	状 況	石 材	塔身形態	備 考
1	南出白山社 1 号塔	津市白山町南出（白山比咩神社）	一石	相輪欠	砂岩	無地	
2	成願寺 1 号塔	津市白山町上ノ村（成願寺）	組合式	笠	花崗岩		下面に納孔
3	西住寺塔	津市白山町上ノ村（西住寺西）	組合式	笠	花崗岩		
4	成願寺 2 号塔	津市白山町上ノ村（成願寺）	組合式	笠	凝灰岩		下面に納孔
5	成願寺 3 号塔	津市白山町上ノ村（成願寺）	組合式	塔身	溶結凝灰岩	梵字	上面に納
6	真光寺塔	津市白山町中ノ村（真光寺）	組合式	塔身	花崗岩	扉形	上面に納
7	成願寺 4 号塔	津市白山町上ノ村（成願寺）	組合式	塔身	溶結凝灰岩	扉形（半面）	上面に納
8	的場観音寺塔	津市白山町川口（的場観音寺跡）	組合式	塔身	花崗岩	扉形	
9	川口白山社塔	津市白山町川口（白山比咩神社）	組合式	相輪先端欠	砂岩	扉形	
10	南出白山社 2 号塔	津市白山町南出（白山比咩神社）	組合式	塔身欠	花崗岩		台座は砂岩（後補）

化された棧唐戸は、大和・伊賀では確認できない。このことから、図案化棧唐戸表現は雲出川中流域が独自に創作した表現と考えられる。

細部手法では、塔身と笠との接続方法に特徴がある。5、7では、塔身上端に柄を設けている（したがって笠下面に柄孔がある）。伊賀の石造宝塔では、塔身上面は平らに調整されるものが見られる⁽³⁹⁾ので、柄式も当地の特徴である可能性がある。

石造宝塔の所属時期については、基礎と相輪の形態から推測すると、横長の基礎を呈する1・9・10は、いずれも一四世紀後葉・一五世紀初頭以前と考えられる。なかでも1（南出白山社1号塔）は、一石調整という特殊なあり方で、大振りの相輪で基礎が著しい横長を呈することから、一三世紀後葉頃にまで遡る可能性が高いと見ている。部材のみである2、8は、概ね一五世紀中葉以前のものと考えられる。

さて、当地の石造宝塔を以上のように整理すると、一三世紀後葉の南出白山社1号塔を初現としながらも、その後しばらく空白期が続くことになる。これにつ

いては推測の域を出ないが、南出白山社1号塔は経塚標識塔として造成されたもので、一四世紀後葉頃に隆盛を迎える当地の石造宝塔の動向とは一線を画すると考えている。

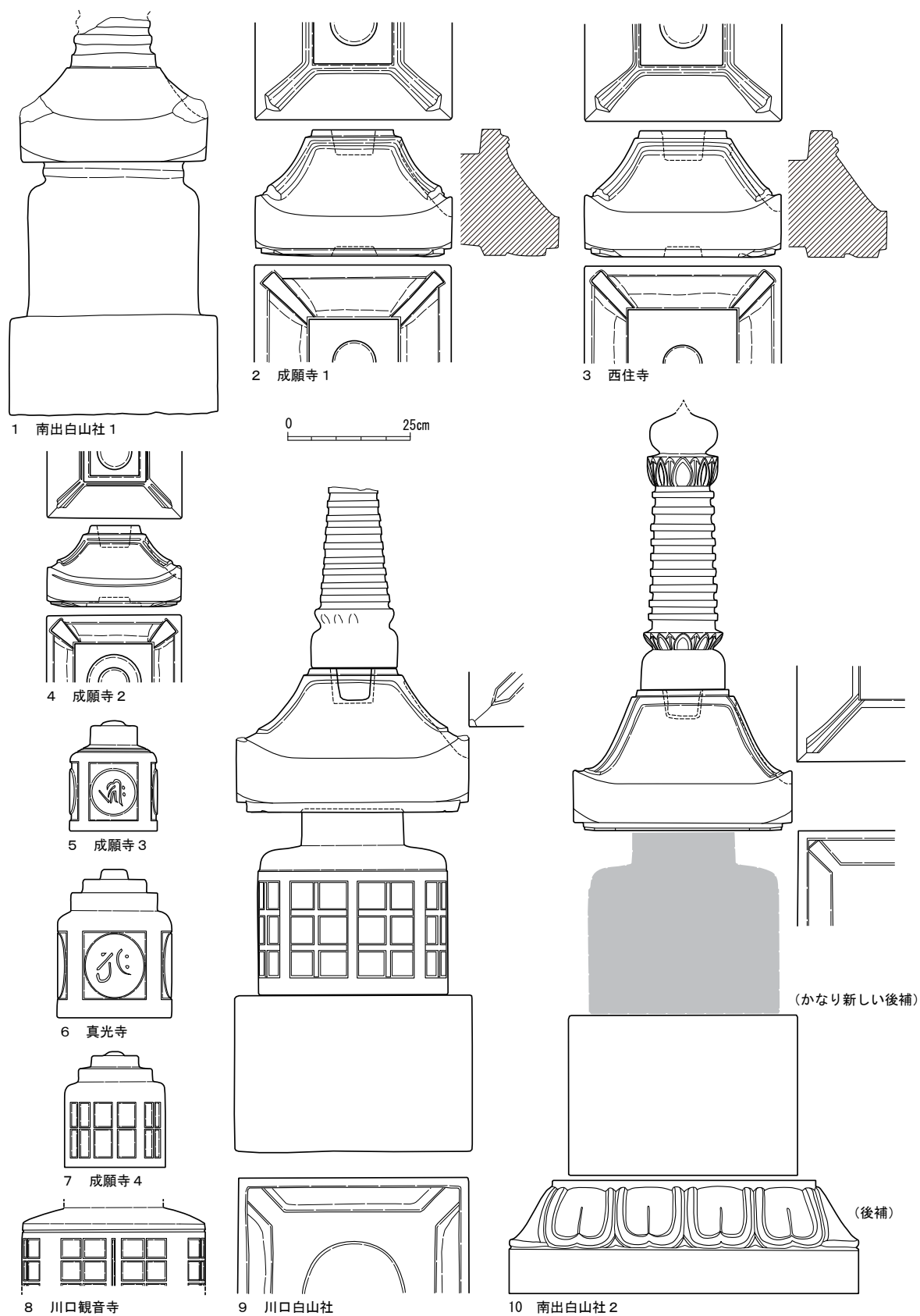
なお、南出白山社2号塔の台座は一六世紀後半頃に後補されたものである。これについては、当地に残る珍徳上人による白山社勧請伝承（天文二二年とされる）が、実際には白山社（坊院を含む）の整備時期を示しているのではないかと考えている⁽⁴⁰⁾。

おわりにー今後の課題ー

小稿では、雲出川中流域で特徴的に展開した白山社と中世寺院を考えるため、遺跡としての坊院跡と石造宝塔の資料提示を行った。小稿の主題が研究基礎資料の提示にあるため、結論的なことを述べる段階ではないが、さしあたりいくつかの見通しと課題を示しておく。

まず、坊院群が成立・展開する契機として、平安末期頃の経塚造営が重要な意味を有している可能性が高いことである。今回調査を行った川口井生白山坊院跡や布引坊院跡では、一二世紀末頃の経塚が確認されている。南出白山坊院跡では現地調査で経塚は確認されなかったが、境内に立つ石造宝塔（南出白山社1号塔）は経塚標識塔の可能性が高いと考えている。時枝務氏は、経塚の造営はその地が「聖地」として展開する契機になるとしており⁽⁴¹⁾、今回紹介した事例はその解釈に符合する。これまでの研究は、経塚を単独で採り上げて検討したものが多いが、重層的な遺跡が展開するきっかけとして経塚の再評価が必要である⁽⁴²⁾。

石造宝塔については、伊勢唯一の集中地域として雲出川中流域は特筆できる。なかでも、塔身の扉形に当地独自の棧唐戸表現が見られることは、石造宝塔が当地で根付き、それを制作する石工が誕生していたことを示唆する。ただし、雲出川中流域が起点となり石造宝塔が他地域へと



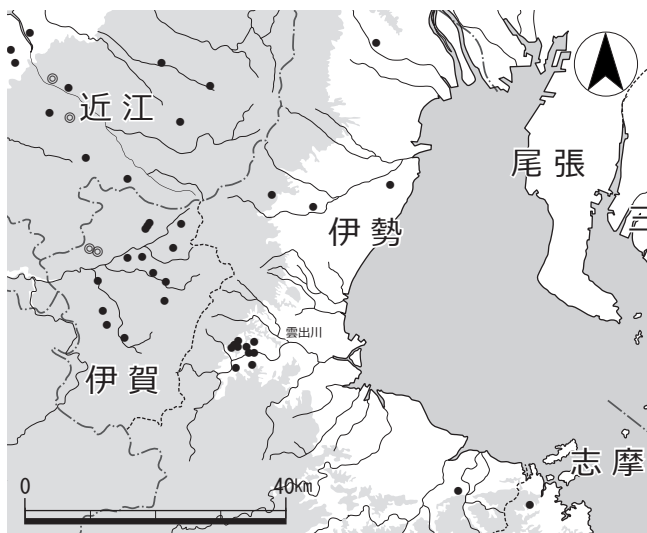
第6図 雲出川中流域の石造宝塔実測図

現在確認している布引坊院跡よりも高所に、別の坊院跡（遺跡）が存在する可能性もある。布引坊院跡から西方三〇〇mほどの間にその形跡は見いだせなかったが、さらに奥地で新たな坊院跡が発見される可能性は残されている。

5 石造宝塔

a 石造宝塔の傾向

つぎに、雲出川中流域における石造宝塔の状況を見る。石造宝塔は、巨視的には密教（天台系・真言系）の教義に基づく仏塔を石造物として表現したものである。初現は平安末期にまで遡るが少例で、鎌倉前期（一二世紀中葉）頃から増加する。また、念仏に関連した宝塔も鎌倉後



第5図 旧伊勢国近隣の石造宝塔分布（●：宝塔、◎：多宝塔）

期から存在し、これは天台系に由来する浄土教との関わりが考えられる。

石造宝塔が最も多く造立されるのは一四世紀前半頃から一五世紀前半頃である。近隣では近江（滋賀県）に事例が多い。三重県内では、伊賀と雲出川中流域に多く見られる（第5図）。伊勢で石造宝塔が集中するのは当地のみで、特筆できる。

b 個別資料の状況

雲出川中流域で確認した石造宝塔の実測図を第6図、その内容を第1表で示した。1は南出白山社境内にある。相輪部の大半を欠損するものの、全体を一石で整形する。

2・4は笠部のみで、いずれも隅木を底面から挟り込んで作り出す共通する手法で整形される。4の軒面には段を意味する横線が表現されている。

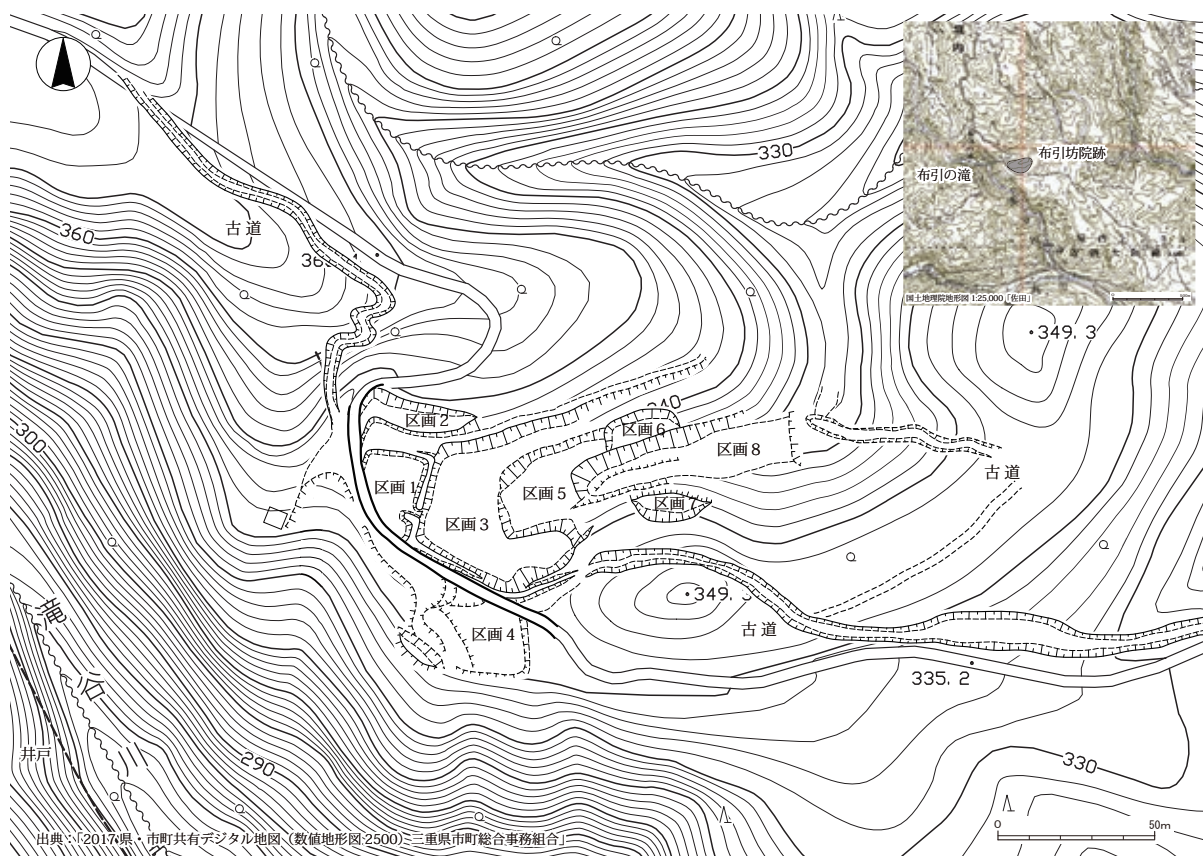
5・8は塔身部。5・6は金剛界四仏の梵字を四方側面に入れる。7・8は簡略化・図案化された棧唐戸の扉形を刻んでいる。7は六分割した側面の三方（全体の半分）のみに扉形を表し、残る半分は無地である。8は図案化されつつも比較的精緻な棧唐戸を側面四方に配している。

9は川口白山社の参道脇に立つ。相輪先端部を除く全体形が分かる事例として当地唯一のもの。笠部下面の隅木は2・4のような挟り出しではなく、底面から軒部までを削ることで整形している。塔身の棧唐戸は8よりも図案化されているが、側面四方に配している。基礎は無地で側面形は横長である。

10は南出白山社境内にあり、1の横に立つ。相輪・笠・基礎は造立当時のものだが塔身と台座は後補。相輪は精緻な調整がなされ、宝珠下と伏鉢上の請花はいずれも複弁八葉。笠下面の隅木表現は9と同様である。基礎の側面形は横長。台座は硬質砂岩製で、反花の形態から一六世紀代の後補と考えられる。塔身は比較的最近の後補である。

c 特徴と時期

雲出川中流域の石造宝塔には、塔身に棧唐戸を表現する事例が複数見られる。扉形の表現は、近江では開き戸表現が主体で、大和や伊賀では棧唐戸が多い。ここから、雲出川中流域の石造宝塔は、大きくは大和・伊賀との関係が強いと見るができるが、当地で見られるような図案



第4図 布引坊院跡の状況

という三つの滝の総称である。大日滝の名称は大日如来に起因すると考えられる。論拠としては弱いが、「大日滝」の呼称から、この坊院跡は真言密教に関係する寺院跡と考えておく。

なお、当地から東に隔たった山麓にある蓮華寺（津市白山町上ノ村）は、「寺屋敷」の子院という。これが事実であれば、布引坊院跡はかなり広大な範囲を考える必要があるが、今回の調査はそこまで及ばなかった。

a 坊院跡の状況

布引坊院跡は伊勢・伊賀を画す布引山地の標高約三四〇mの地点にある。近隣の垣内・上ノ村集落からは遠く離れている。当地の横を流れるのは滝谷川で、下流で垣内川と合流、垣内川はさらに雲出川に合流して伊勢湾へと注ぐ。滝谷川の上流にある瀑布が「布引の滝」である。坊院跡の遺構はこの滝を見下ろす位置にあるが、遺構は滝方向とは異なる北東方向に開く谷地形を中心に広がっている。

中心となる区画1はこの谷の最奥部にあたる。低い土塁を伴っており、東面の南側に虎口がある。西半部は道路の造成で破壊を受けている。区画1から北東方向に谷筋があり、この谷筋の両側に削平段が築かれている。また、現在は布引の滝を望む位置に四阿が設置されているが、この位置にも坊院に伴う施設があった可能性もある。当地が遺跡として認識される契機となった経塚関連出土品は、道の造成中に発見されたとされているので、その位置は区画1西部付近か、あるいは、その南にある現在の四阿付近と考えられる。

なお、布引坊院跡に至る参道（古道）は、東方約一・八kmにある「青山メモリアルパーク」の、さらに下方から続いている。この道は幅約3mの溝状を呈し、坊院跡近くでは幅6mほどにまで広がった箇所もある。また、この古道は区画1の西方斜面を経て尾根上に至り、さらに高所の西方へと続いている（一部は東海自然歩道と重なる）。そのため、

3 小倭南出の白山社と坊院跡

a 南出白山社の伝承

つぎに津市白山町南出に鎮座する白山比咩神社の周辺に見られる坊院跡を見る。貞享三（一六八六）年五月の年記がある「白山妙理大権現本記」（成願寺蔵³⁶）には、当地は「風神森」と呼ばれ、末社・宝蔵・回廊・鐘楼・風宮等が立ち並んでいたこと、天文二二年に鎮徳上人が白山権現を勧請したこと、天正年間の兵乱によって灰燼に帰したが、江戸前期の寛文・貞享年中に白山妙理大権現・若宮八幡・牛頭天王・風宮・龍神・弥勒堂・十二社などが再興されたこと、などが記されている。

南出白山比咩神社の周辺にも、川口井生白山坊院跡に類した関連遺構が展開している。当地の埋蔵文化財包蔵地名は「南出白山比咩神社遺跡」とされているが、ここでは「南出白山坊院跡」と称し、状況を見ていく。

b 坊院跡の状況

南出白山比咩神社は北西方向に派生する標高約九〇m（山麓集落部との比高差約四〇m）の低丘陵頂部に鎮座する。現在は丘陵北西隅に鳥居があり、小型車登坂用の道となっている。地元の方の話では、丘陵西部からの道は車道用も兼ね新たに作ったものである（ここにある鳥居も元は現在の国道一六五号の脇に建てられていたものという）。丘陵北東裾にも鳥居があり、そこから通じる古道1が本来の参道である。また、古道1とは別に、鳥居から東尾根（区画11・12へと至る道もある（古道2））。

現在の白山比咩神社が鎮座する西尾根は「へ」の字形を呈しており、最高所に社殿等がある。尾根の頂部および南斜面部を中心に坊院跡ないしはそれに関連すると見られる削平段が連続する。白山社から一段下の削平段に二基の宝塔があり、「鎮徳上人供養塔」の看板が立てられてい

る。また、この尾根の南麓には、坊院跡に至る古道3が通じている。

東尾根の頂部には二つの幅広い平坦地が造成され（区画11・12）、東尾根と西尾根間の谷奥部にも尾根を削って平坦地が造成されている（区画10）。このうちの区画10には一六世紀前半頃の五輪塔がある。東尾根周辺では、一五世紀頃と考えられる常滑産陶器片のほか、区画11・12付近ではコビキB手法³⁷の丸瓦が数点確認できる。

以上の状況から、南出白山社の周辺にも坊院群が形成されていたと考えられる。散布する遺物からは、区画11・12には瓦葺き屋根の仏堂があったと考えられる。

なお、標高の高い南側の尾根頂部付近も踏査したが、経塚やその他の施設は目視確認できなかった。

4 布引の滝を望む坊院跡

a 既存の調査と伝承

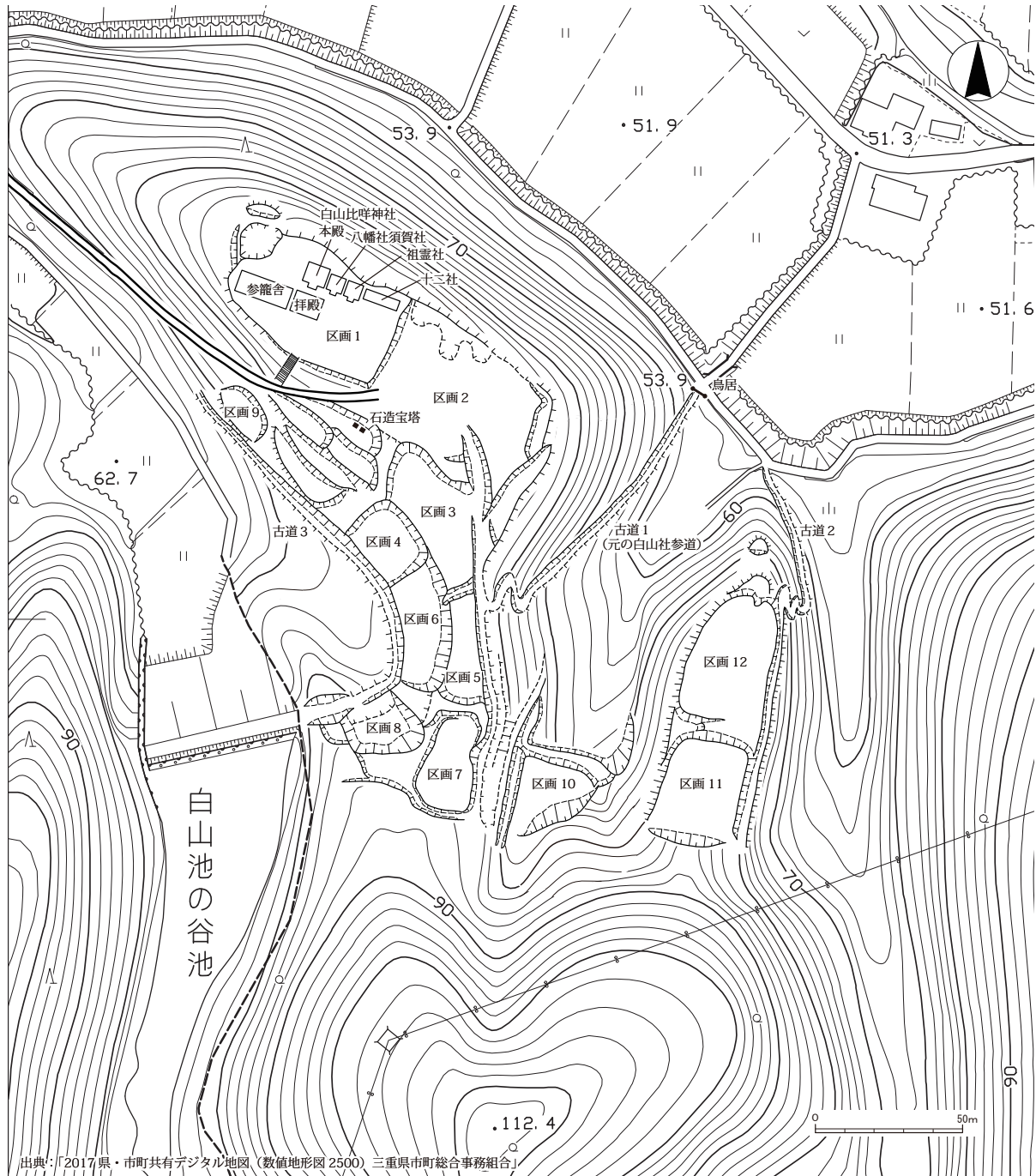
津市白山町垣内の山中、「布引の滝」の傍らにも坊院跡と考えられる遺構が展開している。当地は現在、「青山経塚」という埋蔵文化財包蔵地名で把握されているが、かつては「倭寺屋敷経塚」と呼ばれていた。昭和二四年頃、布引の滝へ至る車道建設の際に土製経筒や和鏡が出土し、当地の通称「寺屋敷」を採用してこの名が付けられたようである。出土遺物の概要は紹介されているが、これまで現地（遺跡）に関する報告はほぼ皆無である。

当地は、後述のように明らかに寺院関連と思しき遺構が見られ、一部が埋蔵文化財包蔵地である「青山経塚」の範囲に入る。しかし、「青山経塚」の名称では、遺跡全体の性格としては誤解を招き易いため、小稿では「布引坊院跡」と呼称する。

布引坊院跡の西にある「布引の滝」は、「霧生滝」、「飛竜滝」、「大日滝」

坊院（寺院）は、平安末期からあった可能性はあるが、石造宝塔が造立される一四世紀後半には存在していたのではないか。「荒廃記」の記載に拠れば、坊院群は江戸前期まで存続し、その後は真言院のみが残存していたことになる。このあたりの詳細は今後の調査を待つほか無い。

以上のことから、川口井生白山坊院跡は、平安末期から江戸期にかけて重層的に形成された遺跡と考えられる。なお、当地の現在の小字名は「山尾田」で、江戸後期の地誌『勢陽五鈴遺響』には川口村の集落として「山雄田」の名が見える。³⁵⁾ 現在当地に民家は無いが、江戸期には何軒かの民家が存在していたものと考えられる。したがって、この遺跡も江戸期の民家による改変が加えられている可能性がある。



第3図 南出白山坊院跡の状況

江戸前期以前の当地を考えるにあたっては現地踏査と合わせ検討の価値がある。そこで、川口白山社を含めたこの地を「川口井生白山坊院跡」(埋蔵文化財包蔵地「川口白山比咩神社南西遺跡」の一部を含む)と称し、具体的に見てみよう(第2図)。

b 坊院跡の状況

現在の川口白山比咩神社には、山麓から真言院まで通じる車道が付けられている。また、真言院から本殿までの間にも関係者のみが通れる車道がある。このため、いくつかの滅失箇所があると考えられるが、それでも多くの遺構が現地に残されている。川口井生白山坊院跡は、白山比咩神社本殿から真言院にかけての区域(I)、真言院の南から西にかけての丘陵斜面部区域(II)、古道を挟んだ南側の区域(III)、南西丘陵部の経塚・中世墓群およびその近隣区域(IV)に分けられる。

Iの区域では、丘陵頂部に白山社がある。そこへと向かう石段の左右は雛壇状に削平段が造成され、このうちの一箇所に石造宝塔が置かれている。真言院の北東上方にあたる削平段は「鐘楼跡」とされ、鐘楼堂に相応しい四個の礎石が残る。なお、白山社本殿の横には元亀四(一五七三)年銘の石造灯籠がある。

IIの区域は丘陵斜面部で、比較的面積の広い削平段が連続して造成されている。なかでも区画4から区画7の4区画は、ほぼ一直線上に並ぶ。区画6と9には区画内に江戸期以降と考えられる方形に組まれた石列がある。区画4は江戸期から現代にかけての墓地となっており、なかには天正十(一五八二)年八月銘の一石五輪塔が含まれている⁽³⁰⁾。西端にあたる区画12には、自然石で造られた江戸時代末期以降とみられる手水鉢がある。そこには「八幡社跡」の木製看板が立てられている。

区画8と9の間には、東西方向に幅二・四mの古道が通っている。古道は溝状を呈しており、かつては頻繁な交通のあったことが窺われる。

この道には「井生街道」の木製看板が立てられている。道は区画9の西で三方向に分かれている。区画9は東西約三〇m、南北約三〇mの大きな一区画で、内側に江戸期以降と考えられる石列が方形に巡っている。

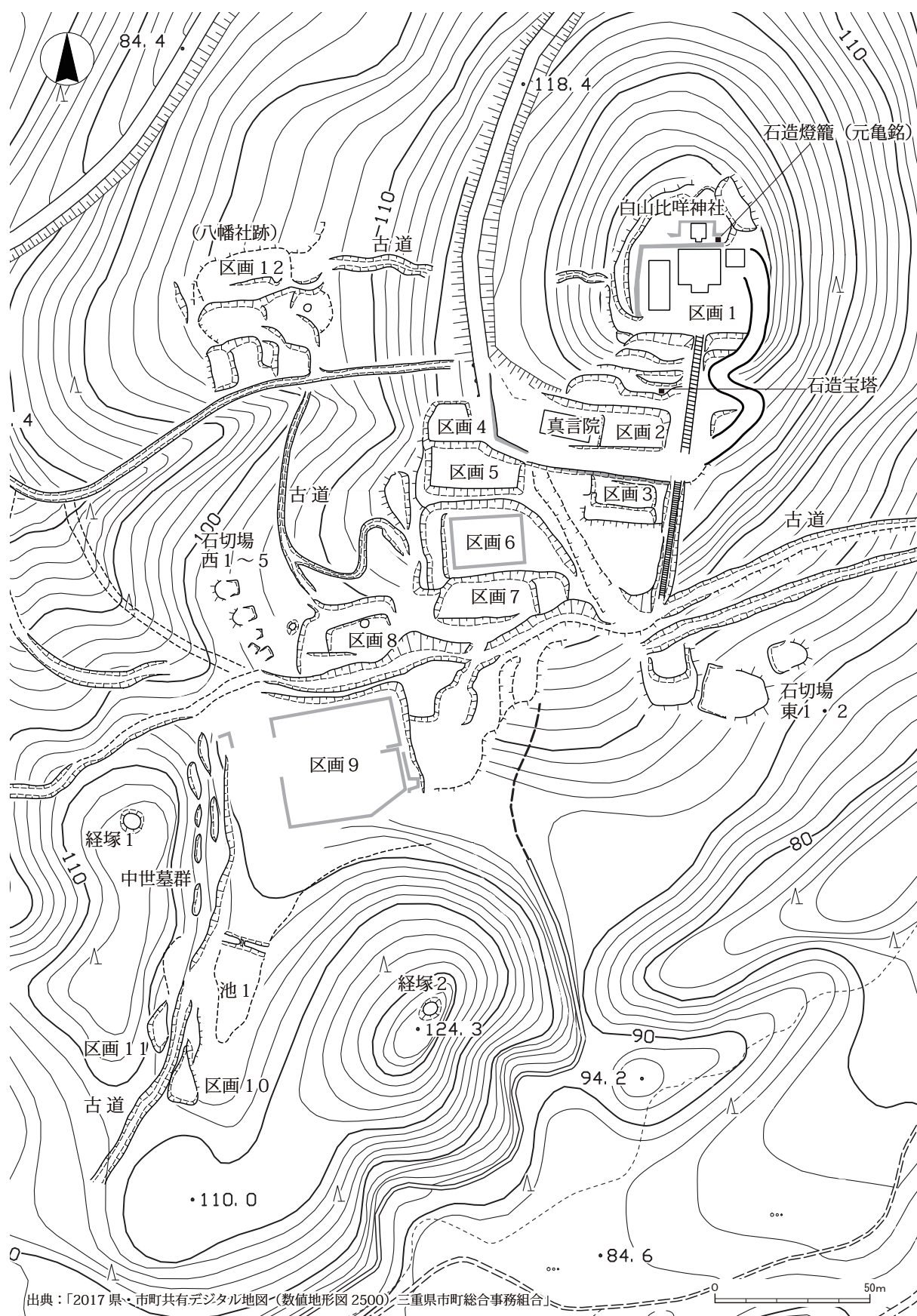
南西丘陵部には一〇箇所ほどの小規模な削平段を複数伴う中世墓群、二基の経塚、削平段が二箇所、そして人工堰堤を伴う池がある。経塚は長軸約四m、高さ一mほどで、自然石が散乱する。一二世紀後葉頃の遺物が採集されている⁽³¹⁾。中世墓群は小規模で不定型な削平段が連続した形状で、段上や周囲に五輪塔・一石五輪塔が散乱する。ここで採集された遺物には、蔵骨器と考えられる一三世紀後半頃の常滑産小形甕などがある⁽³²⁾。石塔は一五世紀後葉から一六世紀代のものである。

これ以外では、区画8の西方と区画7の南東方向に花崗岩の石切場跡がある。西石切場には、江戸中期頃の矢穴が確認できる⁽³³⁾。東石切場跡では江戸中期頃の矢穴も若干見られるが、大きく露天掘りした場所が二箇所あり、明治期以降も採石が続いていた可能性がある。なお、室町期石造宝塔の岩質はこの花崗岩に近似するため、これらの石切場が室町期以前に遡る可能性がある。

c 坊院跡の所属時期

川口井生白山坊院跡の現況は、「荒廃記」の記述と概ね一致する。大日如来・弥勒菩薩が本尊とする「荒廃記」の記述、および今に残る真言院という名称から、当地は白山社を鎮守とした真言系寺院の坊院群が展開していたと考えられる。ただし、具体的な堂舎の位置比定は現段階では分らない。

経塚の採集遺物から、当遺跡の形成は平安末期にはじまると考えられる。中世墓群は一三世紀頃にはじまり、散在する石塔は一五・一六世紀を中心とする。中世墓群のあり方からは、一五・一六世紀が当地の最盛期と考えられる⁽³⁴⁾。



第2図 川口井生白山坊院跡の状況

〔史料一〕

（前欠カ）

右志者、為一志重久同行久

同三郎、現世當生二世大願成

就 円満之状如右 大施□

□□

沙弥成念

嘉元二二年ハ丙午ヱ二月一日

*ハヱは割り文字

この記載から、北家城の旧白山社には、嘉元四（一三〇二）年に造立された社殿が存在していたことがわかる。厳密に言えば、この社殿が嘉元四年当時に白山社であったことを示す史料は無いのだが、永らく白山社の社殿であった建造物の遺品として残された木扉なので、嘉元四年の当時から白山社であった可能性を考えることは許されよう。

以上により、雲出川中流域の白山社は、明応三年以前には勧請されていたことは確実で、嘉元四年まで遡る可能性があると考えておきたい。

c 白山社と寺院

平安中期から江戸後期にかけては神仏混淆の時代である。この段階では、白山社は寺院と一体化していたと考えられる。「七白山」のうち、川口白山社では現在も真言院（現在は無住）がある。江戸期の真言院は、本寺を持たない真言宗の寺院であった。江戸前期には「小天狗」を名乗る住持や、蔵王権現を祀る真福院（津市美杉町三多気）の住持を勤める者もいた。⁽²⁶⁾「小天狗」は江戸前期に伊賀の寺院を数箇所復興した修験僧で、真福院も修験との関わりが深い。よって真言院も修験との関わりが想定される。寛文七（一六六七）年の「勢州一志郡寺改帳」⁽²⁷⁾によると、江戸期の真言院は葬儀を行う檀寺ではないが、祈願寺として崇敬を集めていた。檀家数は五七七軒あり、これは雲出川中流域では成願寺の

七七六軒に次いで多い。

南出白山社に現在寺院は無いが、江戸前期に仏堂があったという記載がある（後述）。飯福田白山社（現在は跡地のみ残る）は真言宗醍醐派の飯福田寺の一角で、周辺は「伊勢山上」と呼ばれる修験の行場である。家城白山社は近隣に開泉寺がある。現在の開泉寺は天台真盛宗だが、南北朝末期の「西大寺諸国末寺帳」（28）に記載される「イエキ戒泉寺」にあたると思われる、南北朝期には真言律宗であったと考えられる。

竹原・山田野・八対野の白山社と寺院との関係は明確でないが、それ以外の白山社は密教系寺院や修験道との関係が窺われる。白山社は寺院の鎮守として位置づけられていたと考えられるが、当地では真言密教系と関わりのある寺院が複数見られることにも注意を要する。

2 川口井生の白山社と坊院群

a 川口井生白山社の伝承

真言院旧蔵（現在は川口白山比咩神社が所蔵）の「山雄田荒廃記」（以下「荒廃記」と呼称）という史料がある。⁽²⁹⁾軸を欠失した卷子装で、全長四〇七・六cm、紙幅三〇・八cm、一二紙で構成されている。万治二（一六五九）年三月に真言院住職の法印快誓が作成し、宝永五（一七〇八）年三月と享保一四（一七二九）年に追記がある。この史料は全て同筆で書かれているので、享保一四年以降に作成された写しと考えられる。

この史料によると、真言院の正式名称は「正白山鎮護国家寺」といい、寺域には摩尼殿（瓦葺）があり、大日如来と弥勒菩薩が本尊で、四〇、五〇棟の坊院（坊舎）があったとする。正白山鎮護国家寺の寺域は広く、白山社はその鎮守として位置付けられていると見られる。

現在の川口白山比咩神社周辺には、後述のように坊院跡と考えられる遺構が点在している。「荒廃記」には誇張表現があると想定されるが、

城館遺跡については悉皆調査報告等があり、⁽¹³⁾ 福原圭一氏や竹田憲治氏による分析もある。⁽¹⁴⁾ 石造物については、『はくさんの石造物』⁽¹⁵⁾ として旧白山町域全体を悉皆調査した報告書が刊行されているし、⁽¹⁶⁾ 当地の石造宝塔に関しては筆者も若干の分析を行っている。⁽¹⁶⁾

このように、当地の歴史的特色を解明するための研究は次第に深化しているのだが、いずれも個別分散的である。とくに白山社をはじめとした社寺に関する検討は未だ希薄である。地に足を付けて地域の歴史を解明するためには、最終的には通史的総合的な視座が求められるが、前提として個別事象の実態解明が必要である。当地に即せば、未だ検討が深化していない白山社をめぐる場の状況を知ることが先決となる。

そこで小稿では、総括的検討の足がかりとなる基礎資料の提示を最大の目的として、白山社関連遺跡を中心とした遺跡（遺構）と、当地の特徴である石造宝塔、それぞれの状況を見ていく。⁽¹⁷⁾

1 白山社（白山比咩神社）のこと

a 白山社の呼称と本地仏

まずは白山社に関する情報を整理しよう。現在の白山社は「白山比咩神社」と呼ばれている。これは明治期以降の呼び名で、江戸期までは「白山権現」、あるいは「白山三所権現」などと呼ばれていた。⁽¹⁸⁾ 「三所権現」は、白山妙理権現（伊弉冉）・大行事権現（菊理媛）・大汝権現（大己貴命）⁽¹⁹⁾ を指す。また、白山権現の本地仏は十一面観音（白山妙理）、聖観音（大行事）、阿弥陀如来（大汝）とされ、山岳信仰と修験道及び密教が融合した神仏習合の形態と概ね理解されている。

b 雲出川中流域の白山社

つぎに、当地の白山社の状況を見る。現在、雲出川中流域には地元で「七白山」と呼ばれる七社の白山比咩神社があり（第1図）⁽²⁰⁾、三重県内唯

一の白山比咩神社集中地となっている。

しかし、「神社明細帳」によると、明治

段階の雲出川流域に白山比咩神社は一二

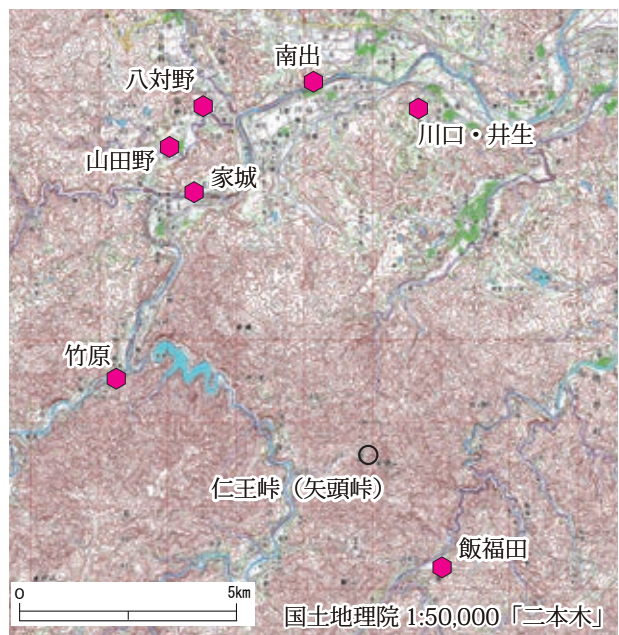
社存在し、三重県内全体では二六社あったという。⁽²¹⁾ 江

戸期以前、白山信仰は今以上に盛んであったと考えられる。

当地の白山社は、『勢陽五鈴遺響』⁽²²⁾ によれば天文二二（一五五三）年に鎮徳上人が勧請したとする。しかし、明応三（一四九四）年九月一日付、小倭百姓衆起請文（「成願寺文書」）に「山雄田白山」、同年同日付、小倭一揆衆起請文（「同」）に「山雄田於神前可為御鬘」とある。⁽²³⁾ したがって、明応三年以前から当地には白山社があり、そこが起請文に登場するほどの崇敬を集めていたことは疑いない。

では、当地での白山社成立はいつまで遡るのか。これに関しては、北家城に鎮座していた白山社（現在は合祀により跡地のみ残る）の木扉（現在は家城神社蔵）に記された銘文が参考となる。⁽²⁴⁾

第1図 「七白山」の位置



第1図 「七白山」の位置